

これからの高校教育について

―誰のため、何のための改革か―

令和 7 年 10 月 1 日 中間報告

若手教員教師塾「これからの高校教育を考える会」

1. はじめに

(1) これまでの経緯と学び

富山県の高校教育は、県民の教育熱心さに支えられ、その気持ちに応えようと教員は努力してきたように思う。しかし、その一方で、保守的な傾向や、新たな改革への対応の遅れが指摘されている。また、少子化の進行に加え、県外の高校や通信制高校への進学を希望する生徒数が増加していることで、県立高校はさらなる生徒数減少の可能性に直面している。これまでの高校再編が「数合わせ」に留まり、教育そのものの変化に繋がらなかったことは、どこか他人事としてとらえていた県立高校教員である我々自身の意識にも問題があったように思う。

私たち「これからの高校教育を考える会」は、そこで働く教員こそが高校再編の議論から取り残されているのではないかという問題意識から、これからの教育を担う教員が主体となって立ち上げた会である。本会は、「これからを生きる、未来を担う子どもたちのために、富山県に求められる新しい魅力的な学校像を創造する」ことを目的に、これまで 4 回の議論を重ねてきた。

この提言をまとめるにあたり、私たちはまず、高校教育を取り巻く様々な立場の方々の声に真摯に耳を傾けることから始めた。各回の概要は、以下の通りである。

第 1 回（5 月 19 日）では、富山県教育委員会がとりまとめた「新時代とやまハイスクール構想」基本方針の共有を行い、以降の議論の基盤を築いた。

第 2 回（7 月 1 日）では、富山県教育委員や県議会議員からの講話を通じ、高校再編の背景や政策的視点を学び、参加者同士でテーマ別の意見交換を行った。

第 3 回（8 月 1 日）では、高校生 3 名の生の声を聞き、学びの現場での実感やニーズを共有した後、県 PTA 連合会や私学関係者からも意見を伺い、県立高校の課題を捉え直した。また、教育内容を軸に、将来の高校像についてグループワークを重ねた。

第 4 回（8 月 29 日）では、中学校教員との意見交換を行い、中高連携の観点を取り入れるとともに、提言づくりに向けたグループ協議を進め、これまでの方向性をまとめた。

こうして本会は、生徒・保護者・現場教員・私学関係者・県議会の視点を学び取りながら、富山の高校教育に求められる姿を多角的に検討してきた。本提言は、そうした学びと対話を踏まえた上でまとめたものである。

(2) 現状認識と私たちの思い

これまでの対話を通じて、私たちは富山県の高校教育が直面する課題の根深さと改革の必要性を改めて痛感した。過去の高校再編が「数合わせ」に留まり、教育の中身そのものを変革するには至らなかったという反省は、多くの関係者に共通する認識である。富山県の高校選択では偏差値による「輪切り」の意識が根強く、画一的な教育システムが生徒の学びの選択肢を狭めていること、そして教員が多忙を極め新しい教育に挑戦する余裕を失っていることも、解決すべき喫緊の課題である。

本提言は、こうした多様な立場の方々との対話から得られた学びと、現場教員としての実感に基づいている。少子化という避けることのできない現実を、教育の中身を刷新する機会と捉え、生徒一人ひとりにとって最善の学びを保障したいという教員の思いを込めた具体的な提案を目指した。

2. ワクワクした新しい学校づくりのために

(1) すべての高校が「自分ごと」

中学生からの魅力の少ない学校が消滅し、学校を「なくす」というイメージではなく、すべての学校が新たに生まれ変わり、新しい学校を「つくる」というイメージで、この高校再編を捉えている。大切なのは「制度や仕組み」ではなく、それぞれの学校が生まれ変わった新しい学校であるという意識を持ち、学びに向かう生徒の意識をつくることであると考え。さらに大切になるのが、「学校とはこういうもの」「母校はなくなる、変わらない」などという固定観念に対して意識改革が必要なのではないかと考える。あくまでも「こどもまんなか」の意識を失わず、そこで働く教師自身がワクワクするような学校づくりを、すべての学校が「自分ごと」として取り組み必要性を感じている。

(2) 教育内容とカリキュラムの柔軟化

県教育委員会が示した「新時代とやまハイスクール構想」実施方針（素案）の「2. 教育内容」について、具体的な取組み例を提案する。

i) 普通系学科

	具体的な取組み例
スタンダード	・年間を通して外部人材を招き、進路への目的意識や学習とのつながりを意識したカリキュラムを構成し、卒業後の進路を考える機会を多く提供。 ・担任に加え、進路専門教員による個別面談を定期的に実施し、生徒が安心して将来を考えられる支援体制を整備。 ・地元の企業や大学等と連携した総合的な探究の時間を充実させ、市役所や地元企業との連携を通じて課題を発見し、高校生として関われることを実行する探究活動を推進。 ・卒業生や地域の若手社会人を招いた定期的なキャリアトーク「キャリアパス講座」を開催し、文理選択、科目選択、進路選択に関する講演会の実施。

	・進路や関心に応じた柔軟な学びの選択を可能にする「課題別履修モデル」を用意し、各科目で習熟度別、分野別などの授業を展開。 ・「文系」「理系」という概念をなくしたカリキュラム編成を検討する。
STEAM	・県内大学や企業と連携した探究活動を実施する「富山×理数×ものづくりラボ」を開設。 ・中高一貫教育を導入し、探究活動の回数と期間を増やすとともに、中学段階から高校内容の学びを先取りする教育課程を用意。 ・県独自の教科横断型科目「とやま学」を設定し、富山の歴史、地理、文学、音楽などを学び、数学や理科も同時に学習。 ・英語または日本語での発表を通じて視野を広げ、表現力・思考力を高めるため、県内外や海外の学校と連携したオンライン探究活動発表会を年1回実施。 ・教員のマンパワーを補うため、学校の教員以外にコーディネーターを配置し、行政、企業、大学とのスムーズな連携を図る。 ・「富山版『TechQuest』」として県内企業と連携した課題解決型プロジェクトを実施し、「STEAM コンテスト」で研究成果発表と地域企業のマッチングを行う。
グローバル	・オンラインでの異文化交流や海外研修を積極的に行い、HR は基本的にオンライン交流とするなど、定期的に交流できる場を用意。 ・留学先からオンラインで高校の授業を聴講するなど、多様な留学方法を検討し、学習機会を保障。 ・常に海外の協力校と接続できる環境を整備し、HR や英語の授業で交流を図るとともに、海外提携校との協定を結び、1ヶ月～1年間の短期・中期・長期の選択制交換留学を実施。 ・英語以外の言語を学べる機会を提供し、海外の高校との共同課題研究も推進。 ・「CLIL（内容言語統合型学習）」を導入し、地理や歴史を英語で学ぶ授業を一部導入するバイリンガル教育や、英語で地域情報を発信する「富山 PR」動画作成などを通して、実践的な言語運用能力を高める。

未来創造	・中学生の高校選択理由の1つである部活動の魅力を向上させ、普通科総合選択制の学校に音楽、美術、体育などの専門科目を取り入れ、部活動を強化。 ・スポーツ分野では、各競技を専門とする指導者を複数配置し、外部コーチや校外での練習環境を整備。 ・芸術コースに関しては、呉羽高校（音楽）、富山北部高校や高岡工芸高校（芸術）など、既存の取り組みを集約・ブラッシュアップする。 ・演劇・ダンス・音楽・スポーツ演技などを組み合わせた総合的な発表会を地域の公共施設で開催し、生徒が企画・運営を主導する「地域公開イベント」を実施。 ・eスポーツの導入により、ICTリテラシーやチーム戦略などを横断的に学べる新分野を創出し、地域アートフェスと連携し、生徒が地域の伝統芸能や現代アートの発信を担うプロジェクトを推進。 ・週あたりの授業コマ数を見直し、水曜・金曜の午後に部活動等の時間を確保しやすくなるカリキュラム編成を検討。 ・全国募集も視野に入れ、近隣に寮を建設し、県内生徒も入寮できるようにする。
地域共創	・富山大学で推薦型選抜のような仕組みを増やすことで、高校教育が地域社会の発展に直接的に貢献できるようにする。 ・高校教育機関に加え、職業系専門学科高校や県内の多くの施設を巻き込んだ探究学習や連携カリキュラムを創出。 ・地元企業との連携授業や実習・共同事業を実施し、デュアルシステムとは異なる実地研修をカリキュラムに組み込み、企業支援のもとでの生徒の学び・研究する機会を提供。 ・「とやまフィールドワーク科」を新設し、学期ごとに異なる地域の課題に取り組む実践型教育を推進。 ・『農業×観光』の6次産業化など、地域資源を活かしたビジネス創出を目指す探究活動や、アントレプレナーシップの観点を推進する。

	・「地域と共に学ぶ」イメージを重視し、1年次から地域を知る活動と探究スキル養成を行い、2・3年次で地元企業や自治体の課題探究に取り組む。
エンパワーメント (自己発見)	・特別な支援を要する生徒のニーズの高まりに対応するため、小・中規模校で少人数指導を行う。 ・夜間中学や高等支援学校の併設も想定。 ・生涯学習の一環として、老若男女を問わないカリキュラムや、県民カレッジと定時制高校の「共学講座」的な連動カリキュラムを多角的に展開。 ・「学び直し再スタート支援コース」を設置し、基礎教科を個別または少人数で丁寧に学び直せるようにする。 ・自信をつけた生徒が、STEAM学科の探究活動やグローバル学科の英語交流などにも部分的に参加できる機会を設け、協働体験を通じて自己発見と社会性を育む。 ・アルバイトを推奨し、実社会とのつながりを認識させながら学びを進める。 ・各学年での再履修・再設計が可能な柔軟進級制度「学び直しパスウェイ制度」や、同年代の先輩・OBが学び直し生徒を支援する「ピアメンター制度」を導入。

ii) 職業系専門学科「複数の専門連携と実社会に繋がる教育実践」

- イ) 複数の専門学科（商業・農業・工業・水産など）を併設することで、学科間の連携を図りながらそれぞれの魅力を高める。
- ロ) 厚生労働省の技能検定（技能士）における検定委員を県内機関や民間企業から招き、国の認める技能士を育成するような連携やカリキュラムを編成。
- ハ) 「デュアルシステム×探究」を導入し、職場体験だけでなく「職業課題の探究」を伴う実習を行う実践型カリキュラムを整備。
- ニ) 就職に直結する資格を段階的に取得できる「資格取得プログラム」を設計し、社会人基礎講座を1年次から継続的に実施。

ホ) 農業科と商業科が連携して地域資源を活かした商品開発や販売戦略を行うなど、学科間の枠を超えた地域課題解決への取り組みを推進。

ヘ) 県外企業へのインターン留学制度や、美容・整備・調理など専門職現場を模した「職業別スタジオ」開設を検討。

iii) 総合学科「生徒主体の多様な選択肢とキャリア形成」

イ) (1 学年 5 学級規模以上の) 今より大きな規模を想定し、生徒が多様な履修科目から主体的に科目を選択できるようにする。生徒数が多いことを活かし、部活動の強化も図る。

ロ) 「キャリア・スパイラル学習」を導入し、1 年で職業体験・自己分析、2 年で専門科目の試行、3 年で課題研究という探究のスパイラルを形成。

ハ) 同じ教科の授業でも「難易度」「分野」「理論 or 応用」で様々な授業を生徒自ら選択できるようにする。

ニ) 職業系専門学科との併設により、生徒が工業・商業・農業などの授業や実習を選択できるようにする。

ホ) AI 適性診断と連携した履修設計支援ツールや、進路と異なる分野も継続的に学べる副専攻制度「専攻マイナー制」を導入。

3. 高校再編に付随する提言

(1) 中高連携の視点

第 4 回での中学校教員との意見交換により、中学校教員の高校教育への理解と、高校教員の中学校教育の理解が不足しているという現状が浮かび上がり、中高連携の必要性が強く感じられた。小中連携のように、中学校教員と高校教員による相互の授業見学や出前授業など、相互理解と情報交換の場が求められる。

また中学校教員からは、未来に向けての見通しが持てない生徒が、以前にも増して多数いるという現状報告があった。進路選択において、明確な目標をもち特定の分野への進学を希望する生徒は少なく、将来やりたいこと等が明確に表明できない生徒が多く、高校での学習と将来の仕事との結びつきの意識も希薄であるという。そのような生徒が、総合選択制の中で主体的に教科を選択していけるのだろうか、という懸念も語られた。高校には、様々な経験を通して、自分のやりたいこと、進みたい道を模索できるような「目標探し」「夢探し」の場であることが求められている。さらに「学校に通う意味や価値を実感できる場」として、生徒の自治や豊かな人間関係を育む環境であること等が望まれている。

(2) 高校入試改革

上記のような「目標探し」の生徒が通う高校を想定するなら、その入り口となる入試についても改革が必要ではないかと考える。ほとんどの生徒が高校に進学する現状を考えれば、多様な生徒の力が評価されるような入試の形式があってもよいのではないかと。例えば、大規模校では、「明確な将来への展望を持てないからこそ、総合選択制を希望する生徒」と、逆に「明確な将来への展望があるため、学びたい教科がある総合選択制を希望する生徒」が同じ高校を目指すことが想定される。新時代の高校では、そのような生徒が、入試において自身の力を十分に発揮し、評価されることが大切であると考え。入学後もペーパーではかる学力だけで評価されるのではなく、一人ひとりの個性が活かされるような、環境・雰囲気作りにつながるような入試の形が望まれる。

（３）教員の働き方改革・意識改革

新時代の高校は「こどもまんなか」であると同時に、そこで働く教員たちがワクワクできるような学校でありたい。そのためにはまず教員の働き方改革が求められる。現在の教員の実態は多忙を極め、新しいことに挑戦する余裕のない教員が多い。このような状況で新しい形の高校再編、入試改革、多様な生徒の教育ニーズに応えること等を要請されれば、増大する仕事の負担感・疲労感に辟易する者も少なからずいるのが現状である。富山県の教員は、県民の教育への期待に必死に応えようと努力し、これまでの高校教育を支えてきた。教員のウェルビーイングの実現が、富山県高校教育の、高い水準の教育の提供に直結すると考える。教員自身のワークライフバランスが保障され、充実することにより、教育活動のエネルギーとなる。そのエネルギーを生徒と向き合う時間に費やすためには、校務負担の軽減や教員の増員配置、外部人材の積極的な活用等が求められる。

また、新時代の高校をつくる上で、時代に即した生徒に対応する教員の意識改革が重要と考える。既存の教員研修を見直し、新たな学校づくりに向けた研修を企画し、実施してほしい。県内には、自主的に地域貢献を目指して学生団体を組織・運営する高校生がいる。彼らは、大変エネルギーギッシュであり、活動のモチベーションの源を皆そろって「人から求められること、貢献できること」と語った。彼らの活動の背景には、活動を支援・応援している学校や、教員の体制がある。今後、求められる教員のあり方について研修を重ねられたらと思う。

以上のことにより、我々教員は、今こそ自身のアントレプレナーシップ（新しい価値を創造し、変化を恐れずに挑戦する精神や姿勢）を発揮し、「教師（Teacher）」から、「教育者（Educator）」、もしくは子どもたちの「伴走者（Facilitator）」への転換が求められている。

4. まとめ

本提言は、富山県の高校教育が直面する課題を克服し、「こどもまんなか」の視点に立った、多様な生徒のニーズに応える新たな学びの場を創造することを目指す。学力や偏差値による「輪切り」の意識をなくし、生徒が自身の興味・関心に基づき主体的に学び、将来のキャリアを形成できるような、柔軟で魅力的なカリキュラムと環境を整備することが不可欠である。

そのためには、学校の規模の適正化、単位制教育の推進、外部人材や地域企業・大学との積極的な連携、国際教育の強化、ICTの活用、教員の働き方改革、そして施設の改善等が多角的に進められる必要があると考える。加えて、「文理」や「学科」といった既成の枠組みを超えた学びや、自ら学び、考え、行動する生徒の活動の支援が、これからの教育において求められる。

この一大事業を成功させるためには、県民の理解と意識改革、議会や行政による予算措置と交通インフラの整備が不可欠である。そして、何よりも「何のためにやるのか」という明確な目的意識を持って、中学生から「選ばれる学校」から「行きたくなる学校」へ、そして、「教師がワクワクしながら働ける学校」への転換が求められる。

これからの富山県の高校教育は、生徒一人ひとりが「未来」を創造できる社会の形成者として成熟することを支援することが重要である。

<教師の学び支援塾事業若手教員教師塾「これからの高校教育を考える会」メンバー>

杉原 大司 （上市高校）

中嶋 美奈子（魚津高校）

島 徹 （八尾高校）

猪又 健太 （富山高校）

池田 孝太郎（富山中部高校）

和田 雄也 （富山工業高校）

近郷 智絵 （呉羽高校）

沢辺 直人 （雄峰高校）

澤田 祐太郎（高岡高校）

齊藤 左世子（砺波高校）

中野 祐輔 （石動高校）